

「笑う動物」としての人間の本質構造

下 程 勇 吉

目 次

- 一、直立歩行体制と笑い
- 二、ベルグソンにおける「笑い」の人間学
- 三、柳田國男における「笑い」の人間学
- 四、笑いの逆説的三重性

一、直立歩行体制と笑い

「涙よりも、笑いを描くに、如かず。笑いは人間の本性なればなり」(ラブレール)とまで云われているがごとく、笑いやまた人間独自の本質的特性にほかならない。人間のみが笑う動物 animal risibile である。笑いは、一面において、無意識的植物的生命に関わる交感神経系に属するが故に、例外的には、幼児の笑いにおけるが如く、無表象的自然的にも成立するが、他面においては、大脳にその精神的刺戟を負うが故に、笑いは本来的には「表象」を缺き得ぬものであり、その限り、ロゴス性を帯び、意味をもっている。かく表象的意味性をもつ本来的な

笑いは、直立歩行や発言作用よりおくれで現われる。

しかのみならず、実に笑いは直立し得る人間の体制に本質的に基づけられている。笑いは原則的には上向きの姿勢をとるのである。笑いを殺すために、人はうつむくであろう。本質的には、地にそむいて天に向って立つ人間においてのみ、笑いはあらわれる。横隔膜の前でなく、その上部に肺をもつとともに、独自の「笑筋」*musculus risorius*をもつ人間のみが笑い得るのである。まさに「直立歩行は笑い成立の重大条件である。」(Reisman, R.)と説かれる所以である。

かくして真に「笑う人間」*homo risibilis*は、原則的には、直立歩行人*homo erectus*なのであるが、母乳を飲まされた赤児は、微笑を浮べながら、眠り込むこと、モナコウが指摘する通りである(Monakau et Mourgue, *Introduction biologique a l'étude de la neurologie et psychopathologie*, p. 137)。

かくして笑いは、生理的均衡のとれた健かな乳児の「無心な」笑いからはじめて、洪笑・苦笑・微笑・微苦笑等々と、それぞれの様相において有意味的人間性を表出するのである。笑いを成立せしめるものは、生命の有意味的弾力性のリズムである。笑いは固定化と相容れぬものである。笑いが繪畫の題材となり難い所以である。しかも笑いのリズムには微妙な有意味性が宿っている。精神分裂的人間には、本来の微笑が缺けると云われる所以である。

まさにかかる微妙なりズムこそは、深き精神的陰影を表現するものとして、芸術家を誘うものでもあるのである。寒山拾得やレオナルドのモナ・リザなどの底知れぬ微笑は、その例をなすであろう。笑いを成立せしめる弾力的全体生命のリズムは、精神的超越の深奥にまで通じ得るのである。かく深淺さまざまの陰影を宿して、人間に成立する笑いを基づけるものは、人間の全体生命性の力学にほかならない。笑いの背後には、人生の矛盾や均衡擾乱の起伏上下を敏感に感じつつも、一円正平の弾力的な魂のゆとり、に止まる力動的恒常性の場がひそんでいるのである。

これを要するに、一般的に笑いのリズムなるものは、その生活の平衡を破りて逸脱する契機を動ぜず迫らず悠々とあしらう、游刃余地ある人格の力動的恒常性の場に現れる、大小とりどりの波紋にほかならない。その限り、笑いは、弾力的な全体性に住して、その世界の起伏を「表象」し客観視し得る、人間固有の現象である。笑いはかかる構造を原型として種々なる様態を現出するが、それは一般的に「観念的」である。一たび自己の主体性自体を脅かすが如き、均衡破綻の場に至れば、笑いは消失し、驚き更には戦慄と云う実存的現象が現出する。その限り、笑いは客体的表象観念的であり、開化せる人間ほど、複雑なる笑いを笑うであろう。その限り、笑いは思惟し発言する*homo sapiens*の系統に属する。すなわち、思惟・言語・笑いはひとしく有意味的表象をもつ知性人に属している。

二、ベルグソンにおける「笑い」の人間学

「動物のうちで、笑うものは、人間だけである」とアリストテレスはその「動物部分論」第三巻第十章において説いているが、生命の創造的進化を「生の飛躍」*élan vital*さらには*élan d'amour*の形相において説くアンリ・ベルグソンは、その独自の純粹持續的直観哲学に立脚すると共に、喜劇の巨匠モリエールを心讀することによりて、めざましい笑いの人間学を一九〇〇年四十一才にして公にしたのであった。同書は一九七〇年代には実に三百三十三版を重ねている古典である。

ベルグソンによれば、生命の純粹持續のしなやかな流が、一時さえぎられて固定化される「こわばり」*raidéur*

の粹が出来るところに、笑いは生れて来るのである。もともと純粹持續にして透徹無得の創造的進化の生命の流に往して、自然法爾的に生きている人間の顔は、行雲流水洒々落々、何等のこだわりを見せず悠容迫らず任運自在で無所住であるが、それと凡そ対照的に、一局所にかじりつく人間のこわばった顔は、笑止なものとなるのである。その人間的なこわばりを声なき言葉でほぐすのが、笑いなのである。「自動現象・こわばり・刻みこまれて消えない皺、そんなものによって、或る顔つきが、我々を笑わせるのである。」

そこから、「笑いは、社会組織の表面の機械的なこわばりをしなやかにし」、その「中心はずれ」を矯め直して純粹持續の生命の流が生々と爽かに通ずるように、声なき言葉で局面を打開するのである。かくして創造的進化の純粹持續の生命の源泉滾々たる流をさえぎる「或る単純な機械的行為」を表現するような顔は、滑稽として笑いを誘うのである。「生命の内面的なしなやかさに釣合わないこわばり」が、笑いを誘うのである。繰り返えされるべくもない、純粹持續の生命が、繰り返される機械化の粹組みに編みこまれると、生命はさしあたってやんわりと笑いという意味深重な反撃に出て、事態の平和的打解を企てることに、生命の知慧があるのである。

もしその平和的解決の道が一たび決定的に閉ざされるとき、家庭・集團・社会は破局的局面をむかえ、笑いの女神の代りに暴力の魔神の跳梁する修羅場となるのである。実に「笑いの役割は、こわばりをしなやかに矯め直すことあり、人々を全体社会に再適應させることであり、つまり角をとって円滑にすることである」。うれしさの笑いといい、おかしさの笑いといい、罵りの笑いといい、悲しみの泣き笑いといい、何れも心の緊張・しこりのほぐれならぬはないのである。

実に「人間を措いて、滑稽なものはないのである」。その限り、笑いは本質的に人間固有である。というのも、対人関係のセンスが凍結し硬直する人間は、滑稽である。笑いはそのこだわりを平和的にほぐすのである。特にさりげない笑いとともに、咲き出るユーモアの花は、実に人間関係の精華である。人間疎外に悩む精神病者には、笑いが凍結してユーモアは消え去るのである。

非社会性のこわばりをやんわりとあしらって、それをほぐすのが、笑いの人間的社会的機能である。創造的進化の宇宙的奔流ともいべきエラン・ヴィタール、さらには、エラン・タ・ラムール *elan de l'amour* をせきとめるこわばりをさらりとほぐして、よどみなき生命の本流に呼びもどす洒々落々の生命のリズムにさりげなく咲き出る束の間の人生の華が、笑いである。

まさに「江戸者の生まれそこない金をため」(柳多留)と、さりげなく辛辣なるユーモアを以って、リクルート汚染の今日の東京人をもくすぐるような、笑いの華を咲かせるところに「笑う動物」としての江戸っ子の面目躍如たるものがあるのである。それと好個の双璧をなすものは、ユーモアのセンスをいわゆるジェットルマンシップの一条件とする英国人気質である。

ベルグソンに依れば、非社会的硬直性から、本来の創造的進化そのものの生命のしなやかなリズムの流れへ呼びもどすのが、笑いであるが、普遍的概念と実在の対象との間のちぐはぐな関係から、笑いが生れると、説いた哲学者は、ショーペンハウエルである。彼によれば、いわゆる普遍的概念と実在の対象との間のくいちがい・不適合に急に気がついたとき、人間は笑うのであると、ショーペンハウエルは説き、そこから「理性、従って普遍的概念に欠けるが故に、動物は言語と共に笑いをもちつてがけなすのである」(Schopenhauers Schriften, Bd. II, S. 108) と説くのである。

またこれと類比的に、固定的因習概念を軽くあしらう狂句などの笑いは、日本人の独壇場である。曰く「美しい顔で楊貴妃豚を食い」。

三、柳田國男における「笑い」の人間学

ベルグソンは創造的に進化する「生命の飛躍」(élan vital)を中心とする形而上学的立場を背景として、独自の「笑いの人間」(amoral being)の哲学を展開したが、「日本の祭」の著者として、農耕社会独自の神道哲学を究明し、それを背景として、「笑いは人間の生の楽しさを測定する尺度」とする独自の立場において、笑いの超越的構造を究明した偉材は、柳田國男である。

民俗学的に日本の祭の本質的構造に迫る柳田は、日本の祭においては、幟(のぼり)を立て、太鼓をたたいて、天上の神々の人界への天下りを促すばかりでなく、「神の依り給うべき木」「神の御座となるべき木」「神さまの天降り給う木」を入念に選び尊ぶところ、「要するに、日本の祭は、大となく小となく、都会と田舎、村の公けと家々の祭とを問わず、木を立てずして、行うものは、今とても一つもない」(柳田國男「日本の祭」一〇三頁)と説いている。

かくのごとくして、天上より迎えた神とともに、人々が神の恵みの成果としての五穀を調理し、神と人々が神人同域的な「おこもり」の場において共に味わい楽しむのが、日本の祭なのである。「つまり「籠る」ということが、祭の本体だったのである。すなわち本来は酒食を以って、神をおもてなし申す間、一同が御前に待坐することが、マツリであった。そうして、その神にさし上げたのと同じ食物を、末座において、共に賜わるのが、直会(なおひ)であつたらうと、私は思っている」(同上、一一二頁)。

実に日本の祭においては、人々は「最上の調理」を以って馳走して、「最上級の賓客」が少しでも永く楽しみ、神人同会・自己交流のよろこびを享けようとしたのである。とくにいわゆる初穂となると、「今日、年中行事と呼ばれている、われわれの家の神祭りでは、今でも、その日に、家の者が食べる御馳走と同じ物の初穂を上げる。

と云うよりも、むしろ神様の召し上がるのと、同じものを、神前に列坐して、共に食べるのが、きまりである」(同上、一九五頁)。

このように、日本の祭における神と人間との同域的関係をとらえる柳田國男は、かかる立場をふまえて、独自の笑いの説を展開している。

日本の祭は、神と食を共にするとともに、また同時に、神と笑いをも共にするのである。「神の祭に必ず狂言あり、田楽(せんがく)にはヲカシを伴い、タカラ(たから)は神の前に出て舞い狂う」のも、あげて「神を笑わしむることの如何に大切であつたか」を窺わしめるのである。と云うのも、「神がこの世の中の何物よりもはるかに怖ろしく、如何なる場合にも、これを敵としては、寸時も安穩にあり得ないことを信じてから、人は甘んじて神の笑を受け、次には、わざわざ笑われるような行為をして、且つは御機嫌を取り結び、且つは自分たちの笑われても一言なき者共なることを承認しようとした」からである(柳田國男、「笑の本願」(一九三五年)四七頁)。神と人との間の関係の潤滑油をなすという、笑いの功德を信じた人々は、「神を笑わしむることの如何に大切であつたか」を体(かた)そのもので端的に悟つたのである。

「最初、神の大前に笑いを献じて、これを傍聴した者が、みなそれぞれに面白く興じた」神人相会の笑いを高く評価する柳田は、近年の漫才人の墮落をその「言うことが、一層愚劣で、しかも正直に本人がその阿呆を演じている」と痛烈に批判するとともに、「人生の潤滑油」としての笑いが神人一貫に生きることを祈り、特に「女の咲顔(えがほ)」について、次のような独特の結語を示している。「どうか将来の日本の女性に、不幸がなく、また心の余裕があつて、始終他人の目を怡(よそ)ばしめ、ひいては人生のつどいを清々(すずか)しくする目的ばかりに、神に與えられた、その快いエガオ(笑面)を、利用することができるようにしたいものと思ふ」(「笑の本願」、一九〇頁)。

四、笑いの逆説的・二重性

「神に與えられた、その快い笑顔」といわれるような、純粹無雜な笑いは、また釈迦と迦葉との間の以心伝心の心交の拈華微笑ともなれば、寒山と拾得との間の感應動交の默笑ともなり、「天より眞実賦與せられる笑い」(das Lachen, dem Menschen wahrhaft vom Himmel geschenkt) を体認するところ、マルチン・ルッター(Hergott keinen Spaß verstände, möchte ich nicht in den Himmel.) と敢えて断言しているが、われわれもアンドレ・マルローとともに「偉大なる文明は、ほほえみをもつ」と云うべきであろう。

かくして、「*「せ」*としたところの微塵もない、日当たりのよい笑いが溢れている」(辰野隆)と云われる、モリエール流の清冽透明なる超脱性をもって貫かれている「光の笑い」とともに、人間は他面執拗陰険の煩悩性に発する意地悪き「暗の笑い」をも併せもつのである。

この点に関して、ベルグソンも笑いのうちに、「悪意」「傲慢」等の人間疎外的契機が潜んでいることを見逃してはいないのである。すなわち、笑いが「絶対的に正しいものでもなく」、「必しも親切なものでもなく」、「それが屈辱を與えて縮みあがらせることを役目としている」場合について曰く、「もし自然人の中の最良のものにも、人の悪さか、あるいは少くとも悪意をちよつとばかり、この目的のために残しておかなかつたならば、笑いはその役目をはたせないであろう」。さらにベルグソンは「そこには、我々がために誇つてもよいようなものは、何一つ見出されないであろう」笑いにおいて、「他の人をあたかも自分が糸を引いて操る人形のように見なす傾向」を指摘している。まさに笑いそのものにも寄生する人間疎外的邪悪性の契機を笑いの哲学者ベルグソンは、見逃し

ていないのである。

もともと「生の飛躍」・「愛の飛躍」の正流に挿さす「光の子」に属する爽かな笑いと対照的に、いわば生の創造的進化の袋小路に閉じ込められた、非嫡出児ともいうべき、反逆的な血をうけた「闇の子」に属する棘々しい笑いが、冷笑・哂笑・侮笑・嘲笑・刺笑・諂笑等としてあげられるのである。

かかる棘々しい笑いの人間学的根源は、人間の優越欲・権力欲である。他人に対する嫉妬・憎悪・敵意を内に秘めて、外面は紳士淑女の面子よろしく振舞う人間は、針をつつむ外交的辞令の幾重にも曲りくねった言辞を弄しつつ、冷いうすら笑いを浮べるメフィストフェレス的悪魔に墮するのである。

他人をやたらにせせら笑う態度は、他人に対する毒々しい敵意や不当な優越欲から生まれるのである。「万人の万人に対する戦い」 bellum omnium contra omnes のテーゼをその全人生觀の根本原理としたトーマス・ホッブスは、「他人に対して、忽如として瞬間的な優越欲を抱いたときに、笑いが現れる」とまで説いている。しかしこのような敵意を秘めた笑いの「闇の子」は、もとより天真爛漫の笑いの正統の嫡出児ではないから、「腹黒い嘲笑は、もともと笑いとは言い難い」(ゴールド・スマイス)とまで云われるのである。

ホッブスのいわゆる万人相剋の場に生れる笑いは、まさしく「悪魔の笑い」なのである。「悪の華」を賞でる「赤裸の心」に徹したボードレルが、「悪魔の笑い」を語ると、凡そ対照的に、「神の本願」に帰入する「日本の祭」を究めた柳田國男が、「人生のつどいを清々しくする目的ばかりに、神に與えられた、その快い笑顔」を説くことは、人間の本質的特性の一領域としての「笑い」の領域においても、天地・明暗・陰陽の気を併せ享け、天地の間に直立歩行する人間に固有の逆説的・二重性がまざまざとその露頭を現しているといわれるであろう。実に人間は、游刃余地あるユーモアの笑いととも、全身全霊あげて悪意に駆られる嗤笑をも併せもつ、明暗双々の

逆説的存在なのである。

これを要するに、人間は各々円成・互撰互融の場において、「神に與えられた快い笑顔」を恵まれるとともに、また他面、我慢増長・相互確執の極、「悪魔の笑」にも身を委せるのである。

すなわち明暗雙々の人間性は、その光の象面において、実に釈迦と迦葉との以心伝心の拈華微笑や寒山と拾得との間の相互默契の笑いのごとき超脱透徹の笑いに恵まれるのである。「眞に天国から贈られた笑いは、人間を教育し、純粹な魂のますます高尚な形相に導く」とまで、マルチン・ルッターが説けば、近くは「センス・オブ・ユーモア」を伝統的に尊重する、米国の初等教育において、それを教育評価の一項目として掲げている初等教育の学校もあるのである。

かかる透明爽快な天上的な笑いとともに、また同時に、暗鬱陰湿な地獄的な笑いもあるところに、人間の笑いもまた人間の逆説的・二重性の渦の中に明暗とりどりの波紋を描き出すのである。

すなわち「胸」に謙虚の心の場を開き、「肚」にゆるぎなき重心を持つる、デカルトのいわゆる「高邁の心」*genetivite*から発する爽快な笑いもあれば、それとおよそ対蹠的に、「他人の目にある塵を見て、己が眼にある梁木を認めぬ」「意必固我の心」に汚れきつた陋劣な笑いもあるのである。

直立歩行の成立とともに、人間固有の在り方としての「笑い」も生れ、「ユウモアの無い一日は、極めて寂しい一日である（島崎藤村、「浅草だより）」といわれるのであるが、ユーモアどころか、傲然として「原子爆弾こそは、日本人にふさわしい」とする信条よりして、広島・長崎両市の非戦闘員数十万人を無警告原子爆弾攻撃の犠牲とする命令を下した米國大統領トルーマンと黒人奴隷解放のために全身全霊を捧げた米國大統領リンカンとは、ユーモアにかかわる人間の逆説的・二重性をめぐりて好個の対照を示している。

民主主義の定義の決定版として、ゆるぎなき古典的位置を占めている、一八六三年十一月十九日の「ゲッティスバーグ演説」において、「神のもとに新しく生れ出た自由を米國民が享けるところ、人々の手による、人々のための政治 government of the people, by the people, for the people は、地上から消滅することはないであろう」と道破しているリンカン大統領は、この米國民民主主義の不朽の金字塔を確立する前、一八六一年二月十一日、三十年間住みついたスプリングフィールドを出て、大統領として南北戦争と云う生涯の問題に取組む、その門出にあたり、次のごとく、人々に多大の感銘を與えた告別の辞を残している、「吾が友よ、私の身になれぬ何人も、この別れに臨む私の悲しみの氣持を身にしみて分つて頂ける由もないであろう。私は何もかも此の地の、さらにはここにいられる皆さんのおかげで、今日あるを得たのである。私は、この地に四分の一世紀間住み、往時の青年の私は今やこの老年を迎える至つた。この地で、私の子供達も生まれ、その一人は墓に入っている。今や私は此の地を出で立つのであるが、一体全体、何時どころか、果たして、生きて此の地に帰れるのかは、知るに由もないのである。しかも我が双肩にかかる責務たるや、曾ってワシントンにかかっていた責務より、重且つ大なるものがあるのである。従つて曾ってワシントンに加護を垂れた、神聖なる神の助けなくしては、私は大業を成就する由もなく、その神助あれば、私は失敗する由もないのである。私と共に行き、諸氏と共に留り、至るところ善のためにまします神を信じるところ、相携えてすべてのことが依然として好転することを決然として念ずるあるのみである。私の方から云えば、あなた方が私のために神にお祈り下さるようには、私はあなた方のために神にお祈りして、この愛情を尽きることなき告別の辞といたします」。

このように、情理兼ねそなわる簡潔精到無比の言辞を駆使するリンカンは、プリズ・ペリーが解説するがごとく、その恵まれたユーモアの天分によりて、その文体に生氣と親しむべき自然さを加え、彼こそはユーモア人独

自の不偏不党性・先入見よりの自由性・柔軟な共感性をその一身に体現した米国最大の人道主義的政治家であったのである。

〈注〉 この項目に関する Bliss Perry, Little Masterpieces, Abraham Lincoln, 1902. 以下参照。